



野球に沸いた2023年

数々のドラマ生んだ聖地へ

2023年は野球に始まり
野球に終わった1年だった。
3月のワールド・ベースボー
ル・クラシック(WBC)で
は、日本代表が3大会ぶりに
世界一に輝いた。名将栗山英
樹監督の下、大谷翔平選手ら
大リーガーのほかヤクルトの
村上宗隆選手、ロッテの佐々
木朗希選手らの活躍に日本中
が沸いたのは記憶に新しい。

プロ野球セ・リーグでは兵
庫県西宮市を本拠地とする阪
神タイガースが優勝。大阪の
オリックス・バファローズと
の関西対決が実現し、タイ
ガースが悲願の日本一になり、
ファンを喜ばせた。年末には
大谷選手のドジャース入りが
決まるビッグニュースも飛び
込み、ファン層を広げたので
はないだろうか。私たちが熱
狂の渦に巻き込んだ野球にま
つわる施設を巡った。

(神戸新聞東京支社編集部長 小西博美)

数々の熱戦の舞台となった阪神甲子園球場。
今年はどんなドラマが生まれるのか—西宮市甲子園町

開場100年迎える甲子園球場 選手を身近に感じられるツアー

阪神甲子園駅を降りるとワクワクする。程なく曲線の建物が見えてくる。昨年、38年ぶりの日本で沸いたプロ野球阪神タイガースの本拠地、阪神甲子園球場（西宮市甲子園町）



スコアボードの真下から一望した球場内



スタジアムツアーで入ったブルペン。
バッターボックスへ入って記念写真を撮る人も

だ。8月には開場から100年の節目を迎える。毎年、春と夏には高校野球の歴史も刻んできた。
その歴史を伝える甲子園歴史館主催のスタジアムツアーに参加した。三塁ベンチや三塁ブルペン、スタンドなどを回る。まず、訪れたのはブルペン。試合前に先発投手が投球練習



ロッカールームで担当者の説明を聞くツアー参加者

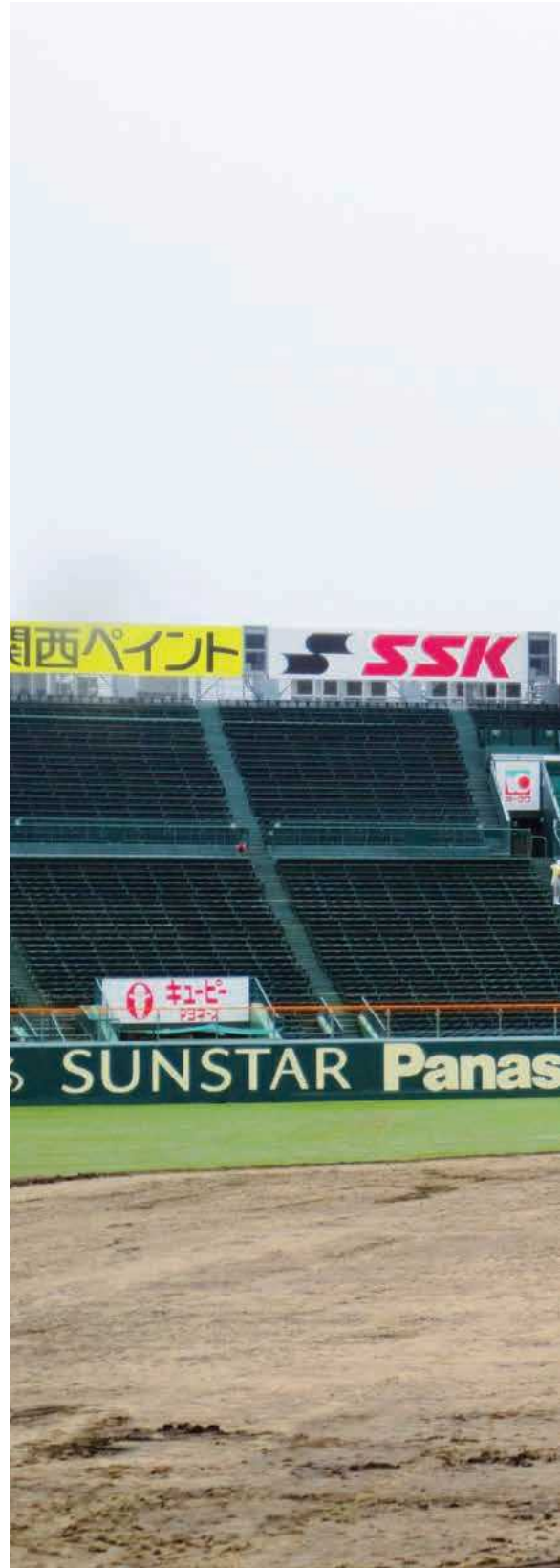
習をしたり、試合開始後は中継ぎ投手らが練習をしたりする場所だ。想像していたより広い。ホームベースやバッターボックスが白線で描かれていて、選手が一球一球投げて、最後の調整をする様子が目に浮かぶ。壁には、三塁ベンチに直接つながる電話もあった。ここはかつて室内

ブルだったそうだ。

次に案内されたのはロッカールーム。網状に区切られたボックスにイスが置かれ、ハンガーもかけられている。「入り口から近いところをベテラン選手が陣取り、遠い奥の方は若手が使えます」と担当者。柱付近の席は人気で、主力選手が複数使うのだそうだ。その後、通路からスタジアムへ。実際に試合があれば、選手や監督と出会うことも。出口に近づくとつれて、土のにおいが濃くなった。

甲子園大運動場の誕生 野球熱の高まりで建設

甲子園球場は1924年8月1日に完成した。敷地面積約5万4千平方メートル、収容人数は4万7400人。当初は鳴尾競馬場内の鳴尾球場で全国中等学校優勝野球大会を開いていたが、野球熱の高まりで新球場を求め声が上がった。そこで阪神電鉄が兵庫県から土地を買い取り、大規模球場を建設することになった。そして同年8月、外部正面4階建て、鉄筋コンクリート造りで50段のスタンドを備え、大鉄傘で覆われた内野席のある「甲子園大



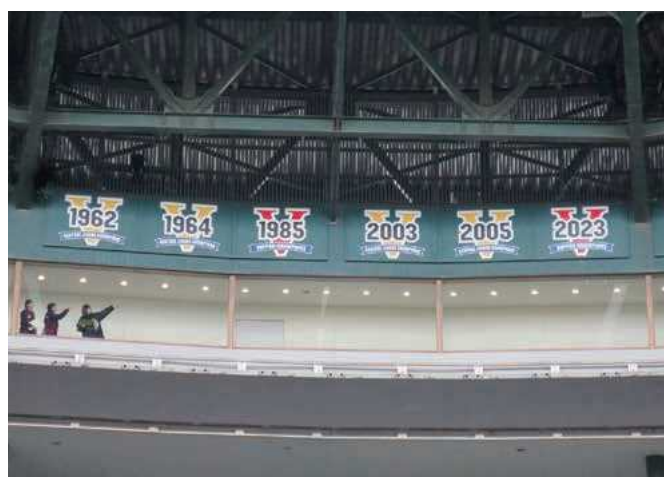
運動場」が誕生した。

当時の甲子園大運動場はその名の通り、さまざまな競技を行っていた。西宮市では、小学6年生と、中学生による「小学校連合体育大会」と「中学校連合体育大会」を半世紀にわたりこの場所で開催している。サッカーやラグビーのほか、スキー大会やタカ狩りも行っていたという。観客席の下には温水プールや体育館もあった。

しかし、そんな輝かしい時代は戦争とともに崩れ去る。甲子園歴史館によると、1942年以降の選抜と選手権大会は中止になり、甲子園は軍需工場や輸送隊の本拠地となった。43年には鉄不足のために大鉄傘を撤去して供出。食料事情の悪化から、グラウンドには芋畑が作られた。同館には、45年の西宮大空襲で受けた、機銃掃射による弾痕が残る鉄扉が展示されている。高校野球の再開は47年まで待たなければならなかった。

圧倒的な存在感のスタジアム 野球の流れ刻む歴史館

スタジアムに出ると、特徴的な形



客席上部には阪神タイガースの優勝を刻むVサインが

のスコアボードとそれを取り囲む外野席が見える。この日は、別の競技会場から模様替えするため黒い土がむき出しになっていたが、圧倒的な存在感がある。客席上部には、阪神タイガースの優勝を示すVサインと年号が刻まれているが、新たに2023の日本一が加わった。ここで春と夏には高校球児たちの熱い戦いが繰り広げられ、新たなヒーローが誕生するのだろう。日本一になった阪神の今年のレース展開も楽しみだ。ヒリヒリするような緊張感のあるゲームと目頭が熱くなるような感動を再び味わえるシーズン



阪神タイガースの活躍を年代ごとに紹介するエリア＝甲子園歴史館

を期待してしまう。

ツアー参加者は実際にベンチに入って座ることもでき、子どもたちや家族連れ、ファンらが盛んにシャッターを切っていた。

ツアー終了後に甲子園歴史館を訪ねる。まず、別館のゲートをくぐると、阪神タイガースに特化したゾーンがあった。「歓喜のビクトリー」と題して1985年、2003年、05年の優勝年を振り返り、優勝ペナントや立役者を紹介。感動を再現している。この冊子を手に取られる頃には、23年日本一のペナントも掲げられているだろう。このほか、球団誕生以来の選手や出来事を年表で紹介す



高校野球の名場面を描くギャラリー＝甲子園歴史館

る「栄光のヒストリー」や、歴史に名を残す名選手をパネル展示する「ヒーロー列伝」も。最近では近本光司外野手（淡路市出身）らを取り上げ、バッテリーンググローブとともに紹介している。

同館「球場エリア」は高校野球と阪神甲子園球場について展開。第1回全国中等学校優勝野球大会（現・全国高等学校野球選手権大会）の第1試合で使われた「始まりの一球」が展示されている。甲子園を沸かせた一戦を描いた「名勝負ギャラリー」も見どころ。1979年夏の大会で、箕島（和歌山）が延長十八回で星稜（石川）に勝った激闘や、

金属バットの快音を響かせた「やまびこ打線」で82年夏と83年春に連続優勝を果たした池田（徳島）など名場面を思い出させてくれる。

最後は球場ゾーン。球場誕生からの歴史やエピソード、甲子園ボウルの魅力を伝えるコーナーなどがある。スコアボードの真下から球場が見渡せる「バックスクリーンビュー」からの眺めも最高だ。同館の安部早依理さんは「23年はタイガース優勝など、野球で盛り上がった1年だった。24年は甲子園球場100周年の記念すべき年。球場の歴史にも思いをはせてほしい」と願う。

一時は緑のツタに覆われていた球場だが、07〜10年のリニューアル工事でいったん伐採された。再植樹にあたり、00年夏に20世紀最後の大会記念に高野連加盟各校に贈られたツタの種子から、生育の良かったものが「里帰り」。伐採前のツタを育成していたものと合わせ再植樹し、伝統を引き継いだ。

世界一の熱気今も伝える 殿堂入り功労者がレリーフに

東京で野球を身近に感じられる場所といえば東京ドームだろう。伝統



東京ドームの一角にある野球殿堂博物館
＝東京都文京区後楽1

の一戦、阪神巨人戦となれば大勢の人が観戦に訪れる。その一角に顕彰事業を担う野球殿堂博物館（東京都文京区後楽1）がある。1959年から日本の野球の発展に貢献した人を顕彰。米国はプレーヤーだけでなく、日本では選手、監督のほか、アナウンサーやライターも含まれる。

野球殿堂には、868本塁打を記録した王貞治をはじめ、野茂英雄、ランディ・バース、金本知憲から正岡子規まで肖像レリーフを掲げる。ずらりと並ぶそのレリーフの面々と数は圧巻だ。米国で誕生した野球がいかに関係が深まってきたかが分かる。

このほか、日本で野球が発展した歴史や、プロ野球各球団の紹介、球史に残る選手のバットやグラブを

展示したコーナーもある。米大リーグのドジャースに移籍した大谷翔平のグラブなども並んでおり必見だ。

最も注目したいのが、WBCで世界

一となった日本が授けられたトロフィーやウイニングボール。優勝の影響か、昨年はここ30年で最も多い約15万人が訪れたという。ウイニングボールも、日本で試合があった際には、終了後すぐに監督のサインを



2023年WBCの優勝トロフィー



野球界の功労者を顕彰し、肖像レリーフを掲げている部屋
＝野球殿堂博物館

もらって選手の用具とともに翌日から同館で見られるようにした。ただ、トロフィーについては貸し出される可能性があるので、来館前にインターネットなどで必ず確認してほしいという。

1月はプロ野球創立90年、12月にはプロ野球読売巨人軍の創立から90年になる。同館ではこの間の歴史を、チームやスター選手の資料・展示で振り返る企画展を2月27日から開催する予定だ。同館の関口貴広事業部次長は「家族や親子で野球を見た感動や思い出をワイワイ語り合いながら博物館を楽しんでほしい」と話している。

〈参考文献〉・「HANSHIN KOSHUEN STADIUM 100 YEARS ANNIVERSARY 2024」